

歌語「藤袴」考--山上憶良の和名創成

著者	片岡 智子
雑誌名	清心語文
号	4
ページ	11-20
発行年	2002-08
URL	http://id.nii.ac.jp/1560/00000323/

歌語「藤袴」考

——山上憶良の和名創成——

片岡智子

はじめに

『古今和歌集』において「藤袴」は、一首の中心に据えられ、一語から見立てる物と見立てられる物が導き出されて修辭を展開する鍵語となっている。それは、文字通り古今的なレトリックを担う代表的な歌ことば^{〔注1〕}であるといえよう。そのような表現を可能にしたのは、古今人が「藤袴」という語彙の中に一語そのものが指示する物象（植物のフジバカマ）の意味と名辭化されたことによって生じた言語上の物象（藤色の袴）の意味を発見した^{〔注2〕}からにはかならない。

けれど、このような古今的表現の可能性は、すでに「藤袴」という語彙そのものが孕んでいたものであった。周知のようにフジバカマとは、秋なかは頭頂に淡紅紫色の小さな花が集まって扇状をなし、背高く咲く植物の固有名^{〔注3〕}である。中国大陸からの渡来植物なので、渡来後に命名されたことは明らかであり、平安初期に成立した『本草和名』においては漢語「蘭草」の和名とされている^{〔注4〕}。したがって「藤

袴」は、漢語「蘭草」あるいは「蘭」の翻譯語と見做すことができる。さらに漢名と和名を比較してみると、和名は蘭草を藤色の袴と捉えて名付けたいかにも雅びな和語となっており、単なる翻譯語というよりも詩的な翻案語というべきであろう。

以上のように「藤袴」は、いわば蘭草を何らかの点で藤色の袴と見做すことによって創られた語彙であり、一語の中にすでに詩的営為が込められているものと解される。古今人としては、そのような詩的営為によって浮上してきた意味の方にも着目して歌ことばとして展開したということになる。

ところで「藤袴」は五音節に整えられており、最初から歌語としてもくろまれた一語だったのでなかろうか。しかも無名の人の言語活動から生まれ得たものとは思われない。これだけ端正な和名を創り出す詩的センスと造語能力は、専門歌人でしか持ち得ないのではないかと考えられる。本稿においては、歌語「藤袴」生成の経緯を探り、どのような詩的発想のもとに誰が、いつ頃創造したものであるかを究明したいと思う。

「藤袴」の用例は、『古今集』以前には『万葉集』に一例しか^{注5}みられない。それを用いたのは、山上憶良で、現在でも人口に膾炙している秋の七種の花の歌に登場する。

萩の花 尾花葛花 なでしこの花 をみなへし また藤袴 朝顔の花
(巻八、一五三八)^{注6}

憶良の歌には『万葉集』に一例しかみられない「孤語」^{注7}を用いるのが特徴とされているが、ここでは、「葛花」と「藤袴」が孤語^{注8}である。葛は我が国の山野に自生し、実用にも供される馴染みの植物であり、その花に着目したのは憶良独特の庶民性を表すものといわれ^{注9}ている。それに対してフジバカマすなわち蘭草は、中国渡来の目新しい花であった。上代において蘭が和歌に詠み込まれたのは、後にも先にも本歌のみで、すでに和語「藤袴」として用いられていることにも注目せざるをえない。中西進氏がこの辺に憶良のひそかな試みがあったかもしれないと示唆する^{注10} 所以であろう。

ところで憶良は、なぜ『万葉集』で誰も取り上げない花を秋を代表する花の一種として選んだのか。それは、憶良の個人的な好みだけではなさそうである。先にも述べたようにフジバカマは中国渡来の植物であり、憶良とほぼ同時代の『懷風藻』には漢語「蘭」として漢詩とその序文に一七例もみられる。したがって上代におけるフジバカマの

用例は、歌語あるいは和語としては一例だけだが、詩語あるいは漢語としては一七例あるといわなければならない。

それらは、いずれも後期懷風藻に属し、一七例中一五例が養老期から天平初年頃までの第三期に^{注11} 集中している。第三期は長屋王の時代で、第三期の「蘭」の用例の中で七例が題詞から分かるように長屋王の邸宅で催された宴でのものであり、この他に一例が長屋王その人の漢詩に用いてある。このようなことから「蘭」は、ほぼ長屋王時代の、長屋王文芸圈における詩語であったことが判明する。この時代、憶良は漢詩こそ詠まなかったが、和歌に関しては『万葉集』の一五一九番歌の左注に、

右は、神亀元年の七月の七日の夜に、左大臣の宅にして。

とあるように長屋王邸での七夕の宴で七夕歌を詠んでいる。また村井出氏も、養老末から神亀初めにかけての憶良の交際圈がおもに東宮侍講者の中と同期の懷風藻作者者に求められると述べている^{注12} ように、憶良の長屋王文芸圈における交流は確かにあったといえよう。したがって憶良は、当時の漢詩を代表する秋の花としての「蘭」を知っていた、フジバカマを選択したのと考えられるのである。

二

では『懷風藻』の「蘭」は、どのように捉えられて表現されているのか。それらはほとんどが二字熟語として登場しており、何かを譬え

るものとして用いられた場合と実際の植物として詠まれた場合に大別できる。一五例中一一例が比喩としての「蘭」である。

『説文解字』に「蘭香草」とあるようにフジバカマは開花後、生乾きのときに芳香（クマリン）を放ち、刈り取った後でもかぐわしい香りを長く保つ^{〔註13〕}。そのような香りを古来中国では麗しい友情とその交わりに譬えた。それらは、すでに日本古典文学大系本の「金蘭」（68）

〔註14〕の頭注で指摘してあるように、『周易』の「同心之言 其臭如蘭」という文言を踏まえたものである。『懷風藻』における比喩として「蘭」を用いた場合、このようなかぐわしい朋友の交わりの譬えとされたものが大半を占めている。

「金蘭」（62 68 106）は、金のように固く蘭のようにかぐわしい朋友の意で、「蘭期」（77）とは蘭の香りのような同心の良友をちぎることを意味しており、いずれも長屋王宅の宴での詩語として用いられている。「蘭筵」（70）とは、蘭のようなかぐわしい同心の集まった宴席の意で、題詞に「春日宴に待す」とあるので天皇の催された宴で詠まれた詩である。先の106とともに、この詩の季節は春であり、「蘭」が純然たる比喩表現であることが明らかである。この他に「芝蘭」（65序 89序 89）と「蘭蕙」（94序）がみられるが、いずれも他の香草とともにかぐわしい兄弟朋友の情の譬えとして用いてある。いずれにしても以上の九例の「蘭」は、『周易』の「同心之言 其臭如蘭」を踏まえて生れた比喩表現である。

一方、「楚蘭」（96）は、楚の国の屈原の故事にちなんだもので、大

系本の補注で述べるように、『文選』所収の離騷経の一句、「紐秋蘭」^{〔註15〕}として「佩」から生じた詩語である。ここでは「沈吟^{シテ}佩楚蘭^ツ」と詠じており、一句の表現そのものを離騷経の一句に学んでいる。「楚蘭を佩ぶ」とは、屈原のように忠貞の身を清く保つという意であり、ここでの「蘭」は清潔な忠心を表している。

この他に「芝蕙蘭蓀」（92）では、四種類の香草を並べ立てて吉野川を叙している。「蘭」は実際に生えていたわけではなく、芳しい香草によって吉野が仙境であることを表現したものである。

以上のように「蘭」による比喩的表現を支えたのは、『周易』と『文選』の各句であったが、それらが懷風藻後期の長屋王時代に集中的に詩語として登場するようになったのは、『芸文類聚』に依るものであることを忘れてはならないであろう。ちなみに『芸文類聚』巻八十一の薬香草部に「蘭」の項があり、しかも先に述べた『周易』と『文選』離騷経の各句がそのまま掲載されている。『芸文類聚』は慶雲四年（七〇七）に唐から帰国したおりに憶良によってもたらされた可能性が高いといわれており^{〔註16〕}、時代的にも養老元年（七一七）からはじまる長屋王時代に重なる。長屋王文学芸園の人々は、おそらく大方の人が『芸文類聚』によって「蘭」を知り、それらの比喩も故事も学んだものと解されるのである。

このように『懷風藻』における「蘭」は比喩として用いられることが多く、実物として登場するのは四例にすぎない。そのうち、確かに植えられたフジバカマだと認められるのは、長屋王邸宅の庭園における「蘭」であろう。

まず「紫蘭」(52序)であるが、これは秋の日、長屋王の邸宅に新羅の客を招いた詩宴における山田史三方の詩序に登場する。

小山丹桂。流彩別愁之篇。長坂紫蘭。散馥同心之翼。

「小山丹桂」と「長坂紫蘭」は対句をなしている。淮南王小山の故事にちなんで「小山」というが、それは長屋王の庭園の小さい山を表し、そこには「丹桂」が色美しく咲いている。そして「長坂」も『文選』の公謙詩などに学びながら(注16)、庭園の小山を巡る長い坂を表し、その坂のほとりに「紫蘭」が芳香を放って咲いているという光景が描写されている。「丹桂」とはキンモクセイのことで、「丹」という色彩表現に対して「紫」の蘭としたのであろう。いずれも花の色が表してあり、実際に庭園には今を盛りにキンモクセイとフジバカマが咲いていたのであろう。ともに中国渡来の花であり、詩宴にふさわしい庭園だったことが窺える。

この詩宴が催された年月については大系本の補注で作者の官位と『続日本紀』の新羅使帰国の記事から考察しているように、養老三年間

七月が適當であろう。養老三年(七一九)の秋、これが植物として確認できる我国最初のフジバカマである。作者の山田三方は憶良と同じく東宮侍講者でもあり、憶良との交流も当然あったもの(注17)と思われる。三方が用いた花の色に着目して作られた詩語「紫蘭」を、憶良は知っていたのではなからうか。

次に藤原宇合の「秋日於左僕射長王宅宴」の詩(90)においても「蘭」が詠まれている。詩の前半であるが、

帝里烟雲乘季月。王家山水送秋光。

霑蘭白露未催臭。泛菊丹霞自有芳。

二句目で王邸の山水に秋の気配が訪れたといっているのが、三句目、四句目は文字通り王の庭園の風景を叙したものであることが明白である。辰巳正明氏はここが佐宝楼を備えた佐保の別邸の庭園であり、中国的な花である蘭や菊が取り合わされている(注18)と述べている。三句目の蘭に置く秋の白露はいまだその香りも催さないという表現は、フジバカマの植生をよくわきまえた描写である。前節でも述べたようにフジバカマは花の終わり頃最もよく香りを放つ。開花してもすぐには匂わない。したがってこの句は、花の咲き始めを表現したものである。ここでは「蘭」は「菊」と一対にされており、いずれも渡来の漢詩の花であった。

この他「蘭州」(56)は「蘭」の植えてある中州の意で、四句目「桂月照蘭州」は、桂のような月が蘭の植えてある中洲を照らすという意味になる。実際にフジバカマは水辺を好むので、庭に池があり、そ

の中洲の辺に植えられていたのであろう。この詩は七夕の宴で詠まれたもので、「蘭」が七夕詩に詠まれていることに注目しておきたい。

そして「蘭香」(67)は、神亀元年(七二四)の元日の宴における長屋王の詩にみられる。六句目の「蘭香染^し舞巾^二」の「舞巾」を大系本では頭巾(かぶりもの)というが、文字通り舞姫が携えている領巾(長いストールのようなもの)のことであらう。舞人の領巾には蘭の香りが染み込ませてあり、舞うたびにその香りが漂う。一句は単なる文飾だけではなく、元旦の宮中での宴の典雅な光景を描写したものである。フジバカマは生乾きのとき最も匂うが、刈り取った後陰干ししておくときさらに半年以上も芳香を保つことができる。古来中国では衣類の芳香剤として珍重されたが、この詩によって宮中などに限られてはいたであろうが、当時その香りを衣に染ませて翌春まで愛でていたことが分かる。庭園における観賞用だけでなく、フジバカマは本草として郊外の苑にも植えられ、次第に奈良の都周辺に広がって行ったことを窺わせるものである。

このように前節で述べた比喩的用法も植物としての「蘭」も懷風藻後期、長屋王時代の詩語であり、漢詩文芸の植物であったことが判明する。「菊」に関しては、辰巳氏の前掲書において長屋王文化圏の花として象徴的に存在していたと述べているが^{〔註19〕}、秋の「蘭」はその精神性とともな菊以上に長屋王文芸圏を象徴する花であったといわなければならない。そしてそれは、時代的にも文化的にもいかにも山上憶良と近い文芸交流圏内における秋の花だったといえよう。

四

以上のようにフジバカマは慶雲四年頃『芸文類聚』が招来されるとともに渡来した植物であり、とくに長屋王文芸圏で愛でられた、いわゆる漢詩文芸の花であった。養老年間にはまだ高位の貴族の庭園にしかない外来の珍しい植物で「蘭」と呼ばれた。憶良はそのような漢語もしくは詩語「蘭」を十分認識して、和語もしくは歌語「藤袴」を創つたものと考えられる。ではなぜ「蘭」を「藤袴」といったのか。その経緯を明らかにするために、ここではまず最初に和名「藤袴」の語源を探っておきたい。

フジバカマの語源については、新井白石が『東雅』において、

フジバカマという義不^レ詳。其花淡紫色。此に藤といふ色に似て。

その辯の筈をなせしが袴に似たる所あれば〔猶俗に藁の袴などいふ

あるが如し〕藤袴とはいひしなるべし^{〔註20〕}。

「藤」については、花の色が淡紫色なのでそれは藤の花の色に似ており、それで藤といったのであろうといい、「袴」については、花卉が筒状になっているので、袴といったのであろうと述べている。そして世間で藁の袴などというのと同じだと説明している。この説はこの後『箋注和名類聚抄』『和訓栞』そして松田修氏^{〔註21〕}、その他辞書類に引き継がれている。

これは実物を見た上での語源説で、「藤」についてはまだしも「袴」

に関しては納得できないところがある。フジバカマの花をよく観察すると頭頂に房状になって固まって「五個の管状の小さな花」^{〔註22〕}が咲く。それら一つ一つの花は確かに花弁が筒状になっているが、あまりに花は小さい。手に取って見てみると誰でもこれが「袴」といえるのであろうかと訝しむであろう。もちろん麦藁と比べようもない。

むしろ全体の立ち姿から「花柱はながく二岐する」といわれている^{〔註23〕}ように、花柱が直線的に二股に別れている姿は逆さにすれば袴に似ている。フジバカマを芳香剤として利用するためには屋内で逆さにして陰干しにするので、あるいはその形を捉えて袴といったのであろうかとも思える。しかし、このような実物の観察からの理解では、いずれにしても納得出来ないもどかしさが残ってしまうのである。

五

和名「藤袴」に関しては、実物の観察からではない要因によって命名されたものと推測される。そしてそれこそが、憶良ならではのことだったのではなからうか。すでに小島憲之氏が憶良の述作にはその奥に漢籍の語句に基づく文学的な部分が多いことを指摘されているが^{〔註24〕}、この一語にもそのような発想が隠されているものと思われる。

そこで想起されるのが、先にも述べた『芸文類聚』の「蘭」の項目に掲載された「文選」所収の離騷経の詩句「紉秋蘭以為佩」である。「秋蘭を紉^ないで以て佩と為す」^{〔註25〕}とは、忠貞でありながら在野に

追放された屈原が、今では秋の蘭を帯びてさまようという意である。

ここでも蘭の香りは貞潔な屈原の心を表すものでもあるが、暗に蘭の佩は官途にあった時服飾として身につけていた玉の佩^{〔註26〕}と対比されて屈原流浪の姿を象徴的に表現したものと捉えられる。

そして、すでに第三節においても言及した「懷風藻」の「沈吟佩楚蘭」は、離騷経の当該の句をまとめて「楚蘭」といい、「佩」については名詞だったものを動詞にして用いている。この動詞の「佩」に注目すべきであろう。

大系本ではその一句を「楚蘭をオブ」と訓んでいるが、『類聚名義抄』にはオビタリ、オハシムに続いて「ハク」という和訓がみられる。また『九条本文選古訓集』では「佩^{ハク}干将^ツ」^{〔註27〕}とある。中段に「干将」が剣名であると示されているので、『古事記』景行天皇の条にみられる「波祁流多知^{ハケルトカチ}」^{〔註28〕}などと同じく、太刀を帯びる場合のハクであることが知られる。しかし下段に単独で「佩ハク」と注が施してあり、「佩」一字を動詞として捉えた場合、古訓ではハクと訓んだことが明らかである。憶良も離騷経の「佩」を動詞として捉え返すことによって、あるいは「懷風藻」の動詞「佩」を認識することによってハクと訓んだものと考えられる。音声上、ハクからハカマ（袴）を連想するのは容易であろう。

そして「佩」の字義は、すべて身に著けることをいい^{〔註29〕}、和語の「はく」も身につけるもの、とくに腰から下に着けることを意味している。玉佩も袴も身に著けるものであり、はくもの^{〔註30〕}であった。その

上、玉佩のようにするためには花を玉に見立てて紐でまとめられたのであるから、おそらく蘭佩のフジバカマは、腰から逆さまに垂らされていたにちがいない。すでに前節で述べたように逆さにした場合、全体的な形としても袴と見做される蓋然性も生じてくる。

一方、「藤」は『古事記』中巻にあるように、その繊維で「衣きぬ襦はかま及またしづく襪くつを織り縫」(二五九頁)うものであり、衣服と熟しやすいう語彙であった。そして『万葉集』では「藤衣」という歌語も生まれている。しかしそれは繊維をいうのであって、色彩をいったものではない。

しかもフジバカマは赤紫で、藤の花は薄い青紫であり、咲く季節も異なる。フジバカマから、直ちに藤の花を連想するのには無理があろう。したがってこれもすでに第三節でも述べたが、『懷風藻』における山田三方の詩序の漢語「紫蘭」があつて、着想されたものと考えられる。すなわちその色彩語彙である「紫」を媒介にして紫色の藤の花を連想し、そこから植物の固有名である「藤」を新たに色彩語彙として用いることを発想したのである。

その結果、色彩を表す「藤」と『文選』の「離騷」の詩句を髣髴とさせる「袴」を複合語化させて「藤袴」としたのである。以上のように和語「藤袴」には、一語の中に詩的営為が込められて創られている。漢語をこのように漢籍の字句と表現を踏まえて新たな和語に翻案することができる人物は、やはり憶良しか考えられない。先述したように『芸文類聚』は憶良によつてもたらされた可能性が高く、憶良もそれに学ぶところが多かつたとは思われるが、「蘭」に関しては長屋王女文芸園

での漢詩による文学活動を抜きにして和語「藤袴」を創案することはできなかったといえよう。そもそも詩語としての「蘭」に対応する和語であつたということ、そして語彙としての美しさと五音節にまとめられていること、最初にも述べた憶良の秋の七種の花の旋頭歌にしかみられないということ、さらにこの後も歌ことばとしてしか登場しないことなどから(注31)、これは明らかに歌語として発想された憶良の創作和名であつたということができよう。

五

以上のように歌語「藤袴」を捉えると、憶良の秋の七種の花の旋頭歌は、たんに秋の花を列挙しただけではなくなる。一首はまず最初に誰でもが認める万葉第一の華やかな「萩の花」をあげ、その後で花として地味な「尾花」、そして予想外の「葛花」をあげて意表をついている。口調もリズムミカルで尾っぽといい、クズという言葉遣いも軽妙で楽しい。次の花は可憐な「なでしこの花」、妖艶な「をみなへし」となる。ここでも花だけでなく、言語表象された撫でるようにかわいい女の子と若い女性のイメージを意識して列挙しているものと捉えられる。ここまでの花を伊藤博氏は、本歌の前の「その一」の一五三七番歌に「指折りかき数ふれば」と表現してあるので、実際に五本の指を折つて数えたものだ指摘しているが(注32)、そうであるとともに五種の花すべてが在来の花でまとめられていることに気づく。

次からは数え上げられて閉じた指を開いていくのであろうが、一首の文脈も、接続詞「又」を使うことによって転換される。「又」についてはすでに井手至氏が憶良だけが和歌に用いていることを指摘して^(注33)いる。ところで『古事記』応神天皇の条をみると、

珠二貫。又振浪比禮、切浪比禮、切風浪比禮、又奥津鏡、辺津鏡。(二五六頁)

とあるように、接続詞「又」は古来から物を転換しながら列挙していくときに用いられている。沢瀉久孝著『万葉集注釈』で述べるように語句の調子を整える働きとともに、ここで憶良は『古事記』のように列挙の文脈転換を図っているものと捉えられる。したがって在来種の花に変わって、中国渡来の外来種の花であるフジバカマが登場するのである。袴は男性官人の衣服であり、歌語「藤袴」から表象されるのは男性のイメージである。語彙によって喚起されるイメージも女性から男性に転換されていることになる。

ところで最後の「朝顔の花」には諸説あるが、以上のような文脈の流れからすると渡来の花であり、男性のイメージを表象するものということになる。諸説の中で、それに該当するのは、キキヨウでもムクゲでもなく、いわゆるアサガオの花しかない。なぜならアサガオは渡来種であり、『本草和名』にみられるように漢語は「牽牛子」である。漢語で「子」は花を意味するが、それを「牽牛ノ子」と訓めば牽牛の男の子のイメージが浮上してくる。そして花が朝開くので「朝顔」と命名したものであろう。これ以上ここでは詳しく論じないが、

これも憶良の創意だったのではなからうか。

そして『懷風藻』ではフジバカマも七夕の詩に詠まれていたし、朝顔の花も七夕にちなむとすれば、これは七夕の歌にふさわしい締めくくりということにもなるであろう。中西進氏は集中の歌の並びと七種の物を数え上げることから、本歌が七夕歌であろうと述べているが^(注34)、歌語の表現からもそれがいえそうある。

おわりに

フジバカマは渡来の珍しい花であったが、それが野の花となるには、少し時間がかかるであろう。憶良のこの旋頭歌の成立年次を伊藤博氏は集中の前後の歌から判断して天平二年ぐらいであろうと推定^(注35)している。慶雲四年前後に渡来し、神亀年間に長屋王邸の漢詩の文芸庭園をいろうづた外来種のフジバカマの花がそれなりに一般化するのものはその頃であろうか。いずれにしても想定されたのは奈良朝の都周辺であって、この歌はあくまでも外来文化を摂取した奈良朝のみやびを体现した秋の七種の花の旋頭歌であることを見過してはならない。

そして歌の表現としては歌語の列挙のみであるが、列挙の文脈というべきものがあり、歌語そのものの創生もあって、きわめて高度な文芸性を発揮した一首であるというべきであろう。憶良が生きた時代は漢名を和名にすることが文芸的営為となる時代だったともいえよう。本稿においては語彙のレベルで「藤袴」にも創意があり、表現がひそ

んでいることを明らかにした。これが『新撰万葉集』や『古今和歌集』になると歌ことばのレベルで表現が展開されることになる。それについては稿を改めて論じたいと思う。

注1 本稿では、すでに小町屋照彦著『古今和歌集と歌ことば表現』（平六年、岩波書店刊）などで示されているように、和歌に用いられた言葉を語彙として「歌語」といい、一首の表現として展開している場合を「歌ことば」として区別して使用した。

2 拙稿「見立て」と物象「歌語」「藤袴」をめぐる——」（『ノートルダム清心女子大学紀要』国語国文学編 平一一年三月刊）

3 牧野富太郎著『牧野 新日本植物図鑑』（昭三六年六月、北隆館刊）参照。

4 日本古典全集『本草和名』（大正一五年六月刊）廿二丁表。

5 『万葉集』以後『新撰万葉集』に初めて登場するが、その歌は『古今集』に入集しているのでここでは古今の歌ことばと見做した。

6 『万葉集』の本文は角川日本古典文庫本に依った。ただし一句ごとに一字あけて表記した。

7 「孤語」は高木市之助の用語（『孤語』『文学語学』第2号、昭三一年五月刊）。

8 林勉「山上憶良の言葉」（『万葉集を学ぶ』第四集所収。昭五三年三月、有斐閣刊）一七七頁。

9 中西進著『山上憶良』（昭四八年六月、河出書房新社刊）「七夕の歌」二〇一〜二〇三頁。『万葉と侮彼』（平二年四月、角川書店刊）「万葉集の七夕歌」二二七頁。

10 中西進著『万葉の花』（昭五二年一月、保育社刊）六八頁。

11 日本古典文学大系『懷風藻 文華秀麗集 本朝文粹』「解説」一二〜一四頁の時代区分に依った。残り二例は第四期の作品にみられる。これ以下、本稿において日本古典文学大系の『懷風藻』を略して大系本という。

12 「筑紫下向以前の憶良」（『国語国文学研究』第35号、昭四一年九月刊）一三頁。なお中西前掲書（注9に同じ）一九二頁では憶良の七夕歌が長屋王主催の詩宴に出席した人々と同席していた場合も考えられると述べている。

13 『植物観察事典』（昭三二年六月、六月社刊）二四二頁。

14 以下（ ）内の算用数字は大系本の作品の通し番号。

15 梶川信行「類聚歌林編纂の意義」（『語文』第四十一輯、昭五一年五月刊）五七頁。なお本文中の『芸文類聚』は中文出版社刊に依った。

16 大系本の補注。そして、呉哲夫「懷風藻にみる「風景」の成立」（『辰巳正明編『懷風藻』平一二年十一月、笠間書院刊所収）において、『文選』公讌詩の重要な構成要素として宴の空間の景物描写が占めることを指摘している。一二三頁。

17 注12の前掲論文、一三頁の表を参照。

- 18 『万葉集と比較詩学』（平九年四月、おうふう刊）「風景論」三八四、三八五頁。
- 19 注18の前掲書、「菊花の酒」二二一頁。
- 20 『新井白石全集』第四、二八〇頁。なお割注は「」に入れた。
- 21 『増訂 万葉植物新考』（昭四五年五月、社会思想社刊）二〇〇頁。
- 22 『原色 日本野外植物図譜3』（昭三三年三月、誠文堂新社刊）参照。実際にも庭に植えて観察した。
- 23 注3の前掲書。
- 24 『上代日本文学与中国文学』中巻（昭三九年三月、塙書房刊）九七八頁。
- 25 本文ならびに訓読は、新釈漢文大系『楚辭』（明治書院刊）に依った。
- 26 「養老律令」の衣服令親王礼服の条に「佩綬玉佩」とある。日本古典思想大系『律令』本文、三五一頁。頭注、三三二頁。「令義解」によると公侯が玄玉の玉佩をつけた。日本では同令の諸王礼服の条において三位以上の礼服の所用としてある。鈴木敬三編著『有職故実大辞典』（平八年一月、吉川弘文館刊）参照。
- 27 中村宗彦著、昭五八年二月、風間書房刊。一七三頁上段。
- 28 日本古典文学大系『古事記』に依った。
- 29 白川静著『字訓』（昭六二年五月、平凡社刊）参照。
- 30 坂倉篤義著『語構成の研究』（昭四五年二月、角川書店刊）にお

いて、「ハカマ」はハクものの意と述べてある。三三〇頁。

- 31 これ以後王朝和歌において歌語としてしかみられない。しかも『古今和歌六帖』では詞書で「らに」、歌では「藤袴」とし、「源氏物語」においても地の文で「らに」といい、歌の部分は「藤袴」といつている。新編日本古典全集『源氏物語③』の頭注（三三三頁）によると「らに」は原音「らん」のn音が開音節化して「らに」となったものという。したがって平安中期「蘭」は日常では「らに」いわれ、「藤袴」は歌語だったことが分かる。なお、『和漢朗詠集』では題と漢詩ともに「蘭」としてある。「藤袴」が歌語として強く意識されていたであろうことは、『和歌植物表現辞典』（平六年一月、東京堂刊）においても指摘してある。

- 32 『万葉集积注 四』（平八年八月、集英社刊）六〇二頁。
- 33 「憶良の用法「それ」と「また」」（『万葉』二六号、昭三三年一月刊）
- 34 注9の前掲書、二〇三頁。
- 35 注31の前掲書、六〇三頁。
- （かたおか ともこ／本学教授）